

Photographic Society of Zone System

ゾーンシステム研究会会報

発行日：2020.7

発行者：中島秀雄

事務局：畑文夫

編集部：荒井崇

NO.70

CONTENTS

- ・ 「ネガを巡って」
…ゾーンシステム研究会第23回写真展の中島代表挨拶文
- ・ ゾーンシステム研究会第23回写真展作品(2)
- ・ ゾーンシステム研究会第23回写真展スナップ
- ・ ゾーンシステム研究会第23回写真展メディア掲載
- ・ 松本ひさ子さんの逝去を悼む
- ・ 日本経済新聞にアメリカの写真家アンセル・アダムスの写真が掲載された
- ・ ファインプリントのためのデジタルネガ(2)
- ・ 日本カメラ中島代表記事掲載



「ネガを巡って」

…ゾーンシステム研究会第 23 回写真展の

中島代表挨拶文

今年、2019 年はフランスの画家ダゲールが写真を発明してちょうど 180 年になる。彼は銀の感光板をカメラにセットして撮影を試みたが画像は現れず、そのまま薬品棚にしまい込んだ。後日、銀板の表面にわずかな感光の痕跡を発見し、銀板写真画像を世界で初めて眺めた人となった。しかし画像は明暗が逆転したネガ像であり、角度を変えて眺めることでポジ像とした。

現在、写真はネガポジ法にかわっている。ネガは情報の送り手であり、印画紙はその受け手となり、ネガは受け手の印画紙に見合う情報を送らなければファインプリントは作れない。フィルム現像やプリント制作にともなう化学変化には微妙な要素が多く、経験値によって処理される時代が長く続いてきた。アメリカの写真家アンセル・アダムスは、一連の処理をゾーンとして視覚化する《ゾーンシステム》の技法を考案し、写真処理の合理的な技法として多くの人達に受け入れられた。

実は、若き日のアダムスも、ポール・ストランドにネガを見せてもらい、その美しさに感動してピアニストから写真家へと転向したのである。

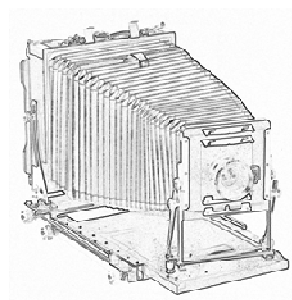
今日、私たちはこのゾーンシステムを活用することで、自らのテーマに見合う最適なネガ作りは容易になっている。しかし、一般にネガは印画紙にプリントするための単なる素材程度にしか思われていない。私たちはネガについても語り合い、ネガ像を見ることも楽しみとしている。光の粒子が銀粒子に置き換わり、銀塩の結晶を通し被写体とつながっている、と心のどこかで感じているからだ。このことがフィルムを使う銀塩写真の大き

な特徴で、ネガは写真家にとって大事なもう一つの作品といえる。

例年、研究会でおこなう作品展の中心は自然風景であるが、東京オリンピック・パラリンピックを間近にひかえた本年は、〈都市〉を課題のテーマとした。

都市空間には多くの人々が集い、建築、運河、橋などには様々な思いと夢がこめられている。コンクリートや鉄骨が垂直に伸び、ガラスやアルミニウムの平面や曲面がつくる輝きは私たちに未来を予感させ〈都市〉は、カメラにとって憧れの被写体と言えるのである。

ゾーンシステム研究会代表 中島秀雄



ゾーンシステム研究会第23回写真展「光への探求」作品(2)

ポートレートギャラリー [2019年11月28日(木) ~ 12月4日(水)]



22.



23.



24.



25.



26.



27.



28.



29.

22. 「a rainy day」 古谷津純一

23. 「ivy」 古谷津純一

24. 「タワーマンションズ」 荒井崇

25. 「森の輝き」 小菅秀一

26. 「水戸芸術館」 小菅秀一

27. 「山小屋」 三浦一馬

28. 「楓(春日山林道)」 小川淳

29. 「The Ground-Blue Canyon」 小川淳



30.



31.



32.



33.



34.



35.



36.

30. 「北欧のマダム」 松本ひさ子
31. 「はるみ・選手村」 松本ひさ子
32. 「森の詩（うた）」 大内元
33. 「築地変貌」 大内元

34. 「翼の夢」 鶴見明秀
35. 「冬のブナ林」 藤田昇
36. 「妙高残雪」 藤田昇



37.



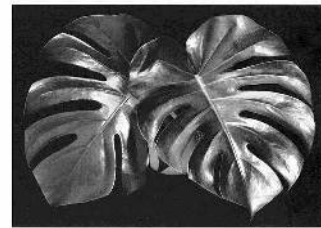
38.



39.



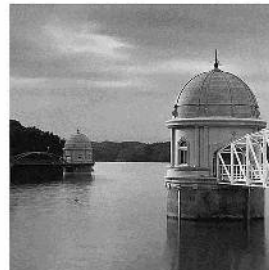
40.



41.



42.



43.

- 37. 「Day and Night」 畑文夫
- 38. 「Abbaye du Thoronet」 畑文夫
- 39. 「舞台裏 (渋谷川 '19)」 北野龍一
- 40. 「名残り雪」 北野龍一

- 41. 「Silver Leaves」 川北弘
- 42. 「Cocoon Tower (繭の塔)」 鈴木知之
- 43. 「Water Tower (給水塔)」 鈴木知之

ゾーンシステム研究会第 23 回写真展スナップ



今年も自由テーマと課題テーマをアレンジして展示。特に今回の課題テーマである「都市」は力強いメッセージが込められた作品が多く、充実した写真展となりました。

また、11月30日（土）午後はギャラリートークを開催。静物写真の得意な人、自然風景に込めた思い、そして今年のテーマである都市の撮影など、それぞれの苦労話、裏話を楽しく語っていただきました。

なお、昨今ポर्टレートギャラリーは1F入口の展示スペースを開設。ここへ代表作3点を展示することにより、通りすがりの方にも写真展をアピールすることができました。

ゾーンシステム研究会第23回写真展メディア掲載

写真展 TOPICS 写真展 TOPICS 写真展 TOPICS 写真

ポートレートギャラリー

第23回「ゾーンシステム研究会」写真展

11月28日
～12月4日
に開催。タイトルは「光への探求—銀塩写真の魅力」。研究会は大型カメラによる



写真の特長と、モノクローム写真の魅力も合わせて写真愛好家ならびに一般の人に伝えることを目的としている。研究会の作品は、自由テーマと課題テーマの二つで進めている。国内外の自然風景や季節の変化、偶然の出会い、光、静物にカメラを向けている。今年の課題は「都市」とした。高層ビルや街並み、橋、公園、運河など都市はコンクリート、鉄、ガラス、木材、プラスチックなどで形づくられている。写真は、それらの素材を分け隔てなく写し撮り、10のゾーンとしてプリント表現することが会員に課せられ、変貌する都市の美しさを追求した。

[フォトステージ 2019年12月号掲載]

◆ゾーンシステム研究会「光への探求—銀塩写真の魅力」 28日～12月4日、四ツ谷駅・ポートレートギャラリー。会員のうち28人が、大型カメラなどで捉えた自然や都市の風景。自らプリントすることでモノクロ写真の美しさを追求した四十数点。03・3351・3002。

[読売新聞夕刊 11月19日掲載]



③ 第23回ゾーンシステム研究会「光への探求」より
撮影=中島 秀雄

11月28日(木)～12月4日(水) — 第23回ゾーンシステム研究会「光への探求(銀塩写真の魅力)」③

ゾーンシステム研究会は、第23回写真展「光への探求(銀塩写真の魅力)」を開催いたします。私たちは、1995年の発足当初から大型カメラによるモノクローム銀塩写真に取り組み、プリントの美しさを追求してきました。ピントガラスに映る美しい逆さの映像は、それ自体が1つの写真的作品として存在し、大型カメラの魅力となっています。

[写真文化 11月号掲載]

東京都
新宿区

第23回 ゾーンシステム研究会
写真展「光への探求—銀塩写真の魅力」



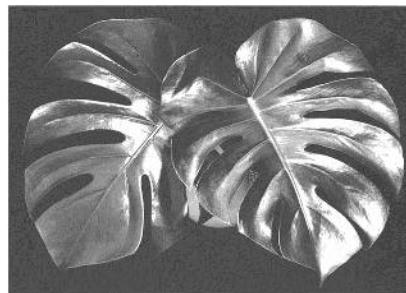
1995年に発足し、大型カメラによるモノクローム銀塩写真に取り組み、プリントの美しさを追求してきたゾーンシステム研究会。23回目となる本展では、「都市」を副題として、自然風景や季節の変化などのほかに、変貌する都市の美しさを追求した作品、約40点を展示する。

期間 11月28日(木)～12月4日(水) 10時～18時
(土日祝日11時～18時、最終日15時まで)

会場 ポートレートギャラリー
☎ 03-3351-3002

[風景写真 2019年11,12月号掲載]

◆ゾーンシステム研究会 第23回写真展



「ゾーンシステム
研究会」写真展

「光への探求—銀塩写真の魅力」 28日～12月4日、10～18時(土・日曜11時から、最終日15時まで)、ポートレートギャラリー(新宿区四谷1の7の12 日本写真会館5階)。☎03・3351・3002

[東京新聞朝刊 11月28日掲載]

松本ひさ子さんの逝去を悼む

ゾーンシステム研究会代表 中島秀雄

3月27日、事務局から松本さんの逝去の知らせが入り、私は驚くばかりだった。

松本さんは、昨年の研究会展覧会の作品制作に苦勞されていた。例会に持参したプリントは明暗がそろわず、いつもの松本さんと違っていました。家事や介護の仕事、ベトナム孤児の母親としての役割、その合間に水泳教室で体を鍛えるなど作品制作に集中できなかったのだろうと思っていました。

松本さんは、1997年に開かれた川崎市市民ミュージアムでのワークショップに参加した三人の女性の一人でした。グラフィックデザインの大学を卒業後、写真雑誌に就職し、写真制作に興味をもつようになったと話された。スマートなスタイルとボーイッシュな髪形が印象に残り、私は、長く写真を続けてほしいという思いから講座終了後ゾーンシステム研究会にお誘いしました。

その後、会員として例会には毎回出席され、研究会の重要な活動の一つである撮影会にも積極的に参加するようになっていました。作品講評に持参するプリントの数も増え、上達も早いと感じていました。仲間からは、そろそろ大型カメラに変更したらなどのアドバイスを持ちかけられ、しばらくして大型カメラに切り替えていました。私は研究会のように大型カメラを主体としたモノクローム写真の取り組みに、女性はそれなりにハ



ンディがあることは分かっていた。

しかし、松本さんはその後、アメリカのヨセミテ国立公園撮影会に三回も参加するなど、その熱意とバイタリティーには頼もしく思っていました。カメラ、三脚を担ぎバーナル・フォールを目指して3キロほど歩く坂道はきつく、途中で健脚の木下さんから三脚をもってあげると声がかかり、大丈夫と返事を返していましたが預けることになり、無事に滝の麓に辿り着いたのです。宿泊は公園の中にある6人用の大きなテントで、フィルムの交換やカメラバックの整理など皆と同じテントの中で進めていました。

次の撮影会は、アンセル・アダムスが長く使用してきた暗室見学とポイント・ロボス海岸の撮影会となり、場所はカリフォルニア州のカーメルでした。有名なエドワード・ウェストンが多くの作品を発表したポイント・ロボス海岸は凹凸が激しく、松本さんは移動のときに転んでひざにケガを負い、病院で数針縫うということになったのです。

帰国後、仕上げた作品をもって私の住む新百合ヶ丘までわざわざ出向いて来られた。

松本さんは好奇心も強く、様々な被写体にカメラを向けていました。人物、静物、建築物、風景など多くのモチーフに独自の方法で取り組んでいたことが写真を長く続ける力となっていたと思っています。また、写真処理の暗室を自宅に備えていたことも素晴らしいことでした。ご主人の理解があったことも大きな助けになっていたことでしょう。

私と松本さんは写

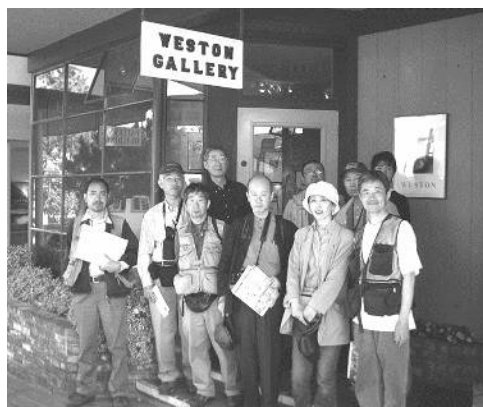




真講座から数えると20年以上にもなり、最も長くお付き合いしてきた一人で、松本さんの写真の上達がそうさせてきたと思っています。その間、研究会の会計という厄介な仕事を長く担当していただいた。

私は、松本さんに何度か数人のグループ展に誘って見ましたが、毎回時間が合わず成し得なかったことが残念でならない。いつか機会を作りたいと思っています。

松本ひさ子さんが長くゾーンシステム研究会員として活動してくれたことに感謝いたします。本当にありがとうございました。ゆっくりお休みください。



アンセル・アダムス暗室見学ツアーにて
(写真上3点)

松本ひさ子さん作品



1.



2.



3.



4.



5.



6.



7.

シエムリアップの風

松本 ひさ子 写真展

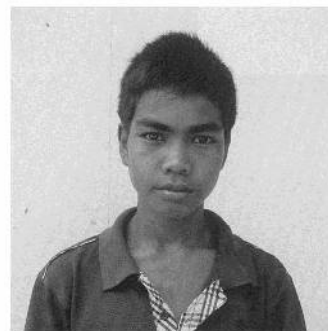


■時間：2011年2月8日(火)～2月13日(日)
■会場：ギャラリーコスモス 入場無料
■開場時間：11:30～18:30(会期中無休)

8.



9.



10.

1. 「Shells」 2002
2. 「Fern」 2005
3. 「サマルカンド」 2018
4. 「スーズダリ」 2016
5. 「Corn」 2003

6. 「旧市街・スペイン」 2016
7. 「Efes (エフェス)」 2011
8. 松本さん個展「シエムリアップの風」 DM
9. 「シエムリアップの風より」 2011
10. 「シエムリアップの風より」 2011

日本経済新聞にアメリカの写真家アンセル・アダムスの写真が掲載された

中島秀雄

今年、2020年は大変な年になった。新型コロナの先行きが見えず、外出制限、人との対話制限は人々に不安な気持ちを抱かせた。4月19日、日本経済新聞の見開きページに、アメリカの写真家アンセル・アダムスの写真と人物紹介が掲載された。アダムスの最も有名な写真、“フェルナンデスの月の出”だ。彼の荘厳で精緻なモノクロームの写真は、長年アダムスの写真技術と写真哲学を学んできた私たちには、冷静さを取り戻す大きなメッセージになった。

写真は翌週にも掲載され、アダムスの写真がこれほど新聞紙面に掲載されたことを私は過去に知らない。新聞社の編集企画にはそれなりに意図があったものとおもわれるが、文面からは一枚の作品作りに対するアダムスの強い意志と写真に対する情熱とが読み取れる。

日本経済新聞は全国紙であり、多くの読者に今日まで写真が果たしてきた情報として、芸術としての大きな役割に改めて関心をもっていただけるとありがたい。

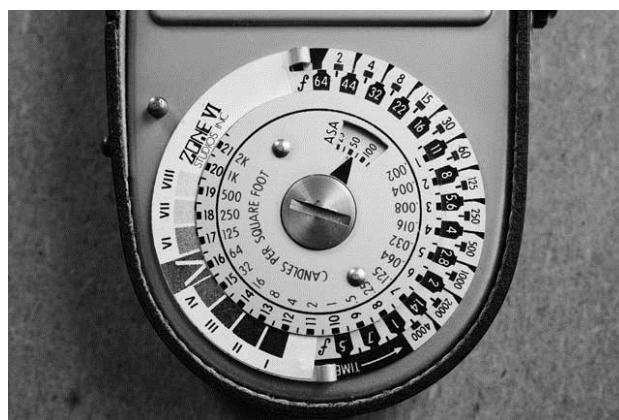
ゾーンシステム研究会にとっては長く、記憶に留めておきたい大きな出来事だった。

掲載された作品“月の出”撮影について (Moonrise, Hernandez, New, Mexico 1941)

混乱の撮影現場

ところで、アダムスにとって“月の出”の撮影は、十分な準備もないままに一瞬の光を撮らなければならない混乱の撮影現場だったのではないかと想像している。

その日、アダムスはサンタフェの北にあるチャ



ウェストン・レンジャー9 露出計

マバレーでヤナギの切り株を撮影していたが、フレーミングがうまくいかず撮影に失敗していた。ムシクチャした気持ちでサンタフェへ向かって車を走らせていた時に、信じられない光景が目飛び込んできた。自ら運転する車にブレーキをかけ、今にも溝に落ちるかもしれないあわてぶりをアダムスはVTRの映像の中で語っている。

灌木の続く平原に教会と白く輝く十字架が見え、その先の山並みには白い糸雲が横にたなびき、上空には満月に近い月が輝いていた。

ステーションワゴンの屋根に登り三脚、カメラを早く急いでと助手たちに要求し、ピントを合わせ、フィルムを装填した後肝心の露出計が見つからない。そこでアダムスは過去の経験から、月の輝度は250 c/ft² (キャンドル・パー・スクウェア・フィート)であると突然思い出し、この値をゾーンVIIに位置づけた。すると60 c/ft²はゾーンVにきて、ASA64のフィルムでGフィルターを着け3倍のフィルター倍数を加え、f/32で1秒という露出の組み合わせでシャッターを切ったと語っている。

ウェストン露出計

そこで、アダムスがよく使っていたウェストンのレンジャー9 露出計を引っ張り出して、250 c/ft²をゾーンVIIに位置づけてみた。すると私の

露出計では、ASA64、1秒、f64 1/2 となり、3倍のフィルターファクターを加えると1秒、f44という値となった。1秒 f32 では1絞りオーバーとなるが、1秒では相反則不軌が生じるフィルムも多くそれで f32 としたのだろうと理解した。

フィルムは何を使っていたのか ASA64 との記述があるだけだ。しかし、1940年にヨセミテで撮影した Clearing Winter Storm (冬の嵐が去って)の撮影フィルムはイソパン 64 と記述され、翌年の1941年に撮影した Mount Williamson (ウイリアムソン山)は、スーパーパンクロ 200 を使ったとなっている。イソパン 64 を使って撮影したとすればそれほど大きな間違いはなく、スーパーパンクロ 200 を使って AS064 で撮影となるとオーバー露出になり月のトーンは出しづらいネガになり、これほどクリアなプリントにはならなかったと思える。

アダムスの開発したゾーンシステムは、1941年に雑誌に公開され、すでに撮影技術は手探り状態を脱出していた。ゾーン、感度、現像時間はほぼ安定した時期で、それ故に露出計がなくても過去の撮影経験からデータは瞬時にひらめき、対処できたのだろう。

G フィルター

この撮影に使われた G フィルターは、コダック・ラッテン No. 15 (フジ SC-54) のことで、私たちがよく使う No. 12 (フジ SC-52) よりも濃いイエローだ。その違いを分光感度曲線から見てほしい。

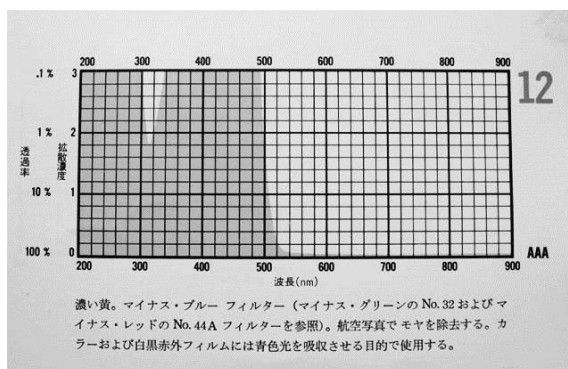
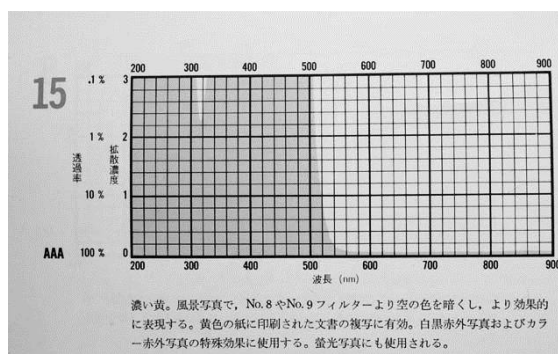
“月の出” が多くのアメリカ人に好まれるのは、宗教的なイメージとして捉えていたのかもしれない。教会と十字架の輝き、山頂にたなびく糸雲と月は神秘的な光景に見える。

1979年12月のサザビーズのオークションで、アダムスの作品 “月の出” は\$22,000 の大金で落札

されたと展覧会図録集に書かれている。

この撮影には、息子(当時8歳)のマイケル・アダムスが一緒だった。マイケルは、「現場ではプリントのようには見えなかった。父はこのときの光景をプリントにビジュアライズしていたのだろう」と語っている。

ここにいうビジュアライズとは、被写体を眺めどのような写真になるのか、どのような写真にしたいのか、最終的な写真を “見る” ことをいう。撮影の前にどのような写真にしたいのか “想定” することいってもよい。ビジュアライズを有効にするためにゾーンシステムを考案し、ビジュアライズを必要としないならゾーンシステムは必要ない、とアダムスはいっている。



ラッテンフィルター分光感度曲線

ファインプリントのためのデジタルネガ (2)

畑文夫

前回 (会報 No. 69) に続き、コンピューターのモニターで見たとおりにプリントするための補正方法を説明します。

■必要な機材

(※印はレンタル利用も可、*印はあればベター)

- Adobe Photoshop (バージョン CS 以上 / Lightroom、Elements は不可)
- Microsoft Excel 又は互換表計算ソフト
- (大判) フィルムスキャナーとフラットベッドスキャナー

フィルムをデジタルカメラで複写する場合はフィルムスキャナーは不要。

反射濃度計が使用できる場合はフラットベッドスキャナーは不要。

※写真画質インクジェットプリンター

- 以上が使えるコンピューター一式

*モニター校正ツール

(X-Rite 社 ColorMunki など)

*色評価光源 (演色 AAA)

*スポット露出計、入射光式露出計

※密着焼ができる暗室設備一式

(引伸し機は不要)

- Kodak Gray Scale (8 インチ) または同等品
- * 18%グレーカード (8×10 以上)
- デジタルネガ用フィルム (ピクトリコ TPS100、ピクトリコ プロホワイトフィルム、 など)
- 銀塩印画紙 (多階調、号数紙いずれでも可・号数フィルターは不要)

○以下に述べるデジタルグレースケール(図 8)や補正計算用 Excel シート(図 15)をご希望の方は筆者にご照会ください。

■補正レイヤーの作成とネガ出力

図 8 に示す「表示用デジタルグレースケール」を Photoshop で開き、全画面表示する。グレースケールは三種類 (n=1.0、1.2、1.4) あるので、Kodak Gray Scale と見比べて一番近いものを選ぶ。(図 9)

仮に「n=1.2」が最も近ければ、以降は「n=1.2 出力用デジタルグレースケール」で作業する。

Kodak Gray Scale の背景には 18%グレーカードを置き、色評価光源 (演色 AAA) で照明するのがよい。グレーカードをスポット測光するか入射光式露出計で概ね EV6.5~7 (ISO100) になるよう照明を調節する。



図 8 表示用デジタルグレースケール

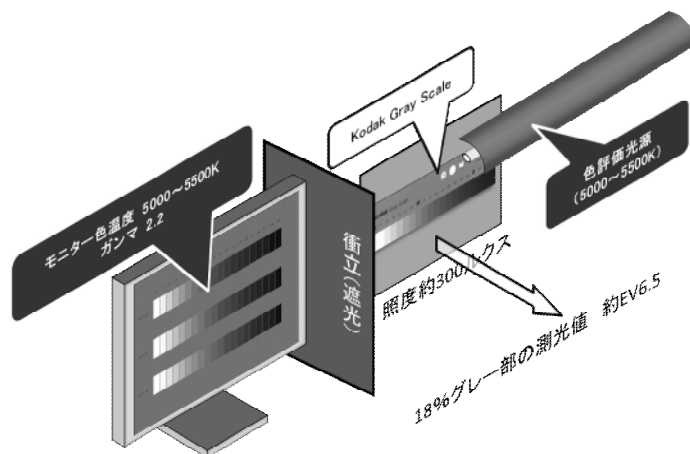


図 9 グレースケールの比較

モニターガンマは 2.2、デジタルグレースケールの灰色が 18%グレーカードとほぼ同じに見えるように輝度を調節する。(モニター校正ツールが使える場合は、輝度 80~100cd/m² 色温度 5000~5500K に設定しておく。)

Photoshop の設定は 編集>カラー設定 からグレーDot Gain を15%にする。

前記の比較で決めた「n」に対応する出力用グレースケールを Photoshop で開き、「反転と補正レイヤー」を表示してネガにする。このレイヤーは初期状態で右肩下がりの直線トーンカーブにしてあるので、単純なネガ反転となる。(図 10)

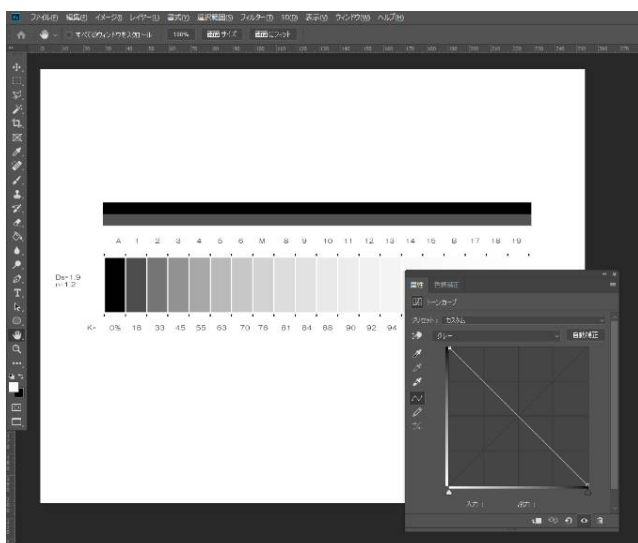


図 10 「反転と補正」レイヤーでネガ反転

これを A4 (又は 8×10) サイズのデジタルネガ用紙に出力する。カラーマネジメントは行わず、印刷オプション「膜面」にチェックを入れて左右反転する。

■ 試し焼き

このネガを 8×10 印画紙に密着焼する。(1) 印画紙は多階調、号数紙いずれでもよい。多階調フィルターは必要ないが、使う場合は 2 号相当を

選ぶ。

まずネガと印画紙全体を一定時間 (例えば 3 秒) 露光し、黒厚紙を 2~3 cm 程度ずつ端からずらし覆いながらそのつど同じ時間で「ステップ露光」する。

仮水洗までが済んだら明室で観察し露光時間を決める (図 11)。この例では黒紙を左から右方向へずらしているの、右側ほど累積露光時間が長くなっている。

1. 黒地部分は次の露光ステップとの境界が判別できないこと^(II)、かつ、
2. 白地 (帯) 部分が灰色にならないこと。

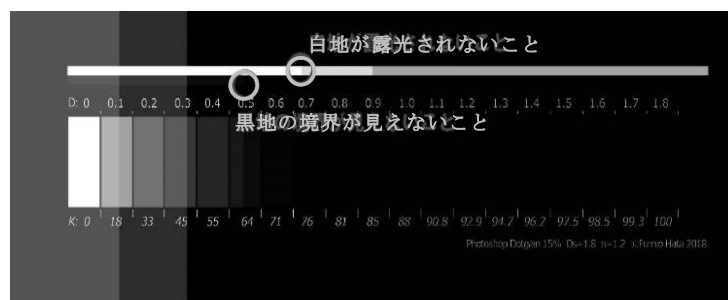


図 11 試し焼き

上記 1 と 2 を同時に満足する範囲で最短の累積露光時間を選ぶ。

もし条件が満足できない場合、つまり黒地が灰色で白帯も灰色になる場合はインクジェットの最大濃度が低すぎる。逆にグレースケールの「D=0」と「0.1」が共に白くて区別がつかない場合は濃度が高すぎる。

いずれの場合もプリンターのマニュアル等を参照して用紙にあったインクジェットの設定を選ぶこと。

(1) 市販のコンタクトプリンターを使う場合は A4 のネガを 8×10 にカットしておくとい。

(II) 判別が難しい場合は、印画紙を光に透かして見るとわかりやすい。

■補正用プリントと測定

露光時間を決めたら、改めて全面均一露光してデジタルグレースケールの密着プリントをつくり水洗、乾燥、簡単なフラットニングまで行う。

こうして得られるプリントは前号の図5のように暗部がつぶれ、モニターで見た階調や Kodak Gray Scale とは一致しないはずである。これを一致させるために、インクジェット出力する時だけ使う補正用トーンカーブレイヤーを作る。

フラットベッドスキャナーの原稿台に Kodak Gray Scale と上記プリントをならべて同時にスキャンする。スキャンは150~200dpi 程度の解像度、16ビットグレーで行い、Tiff 形式で保存する。スキャンの白基準、黒基準は Kodak Gray Scale の A (白) と 19 (黒) のスケールを使う。

保存した画像を Photoshop で開き、カラーサンプラーツール (スポイトツール) で各々のグレースケールを読み取る。このとき RGB 値 (0~255) で測定し (図 12 上)、その値を表に書き込む (同下)。

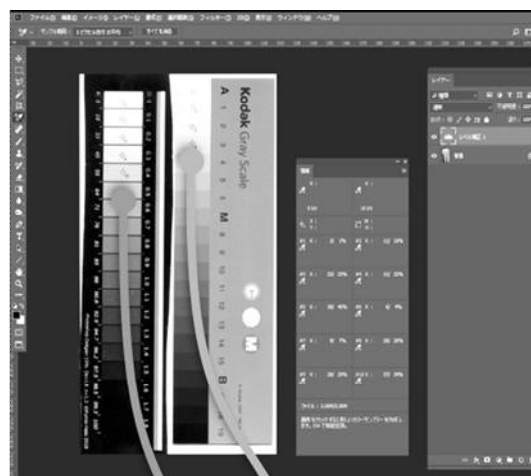
カラーサンプラーでは「11 ピクセル四方の平均」程度を選び、ホコリなどを読み取らないように注意する。

反射濃度計が使える場合はプリントの各グレースケールを測定し、Excel の「補正計算 (反射濃度計) シート」に書き込めば補正データが得られる。

■補正データの作成

図 12 下の表から横軸を K%、縦軸をスキャン結果 (0~255) にとってグラフを二本画く。(図 13) K%は使用したグレースケールの n によって表から選ぶ。

グラフの任意の位置に水平線 (図 13 の点線)



濃度 D	K%			プリント	Kodak Gray Scale
	n=1	n=1.2	n=1.4		
0	0	0	0	250	255 (白点)
0.1	21	18	16	181	234
0.2	37	33	29	120	212
0.3	51	45	41	89	192
0.4	61	55	50	66	175
0.5	69	64	59		
0.6	76	70	66		
0.7	81	76	72	19	128
0.8	85	81	77		
0.9	89	84	81		
...
1.9	100	100	100	4	1 (黒点)

図 12 スキャン結果の測定(上)と記録(下)

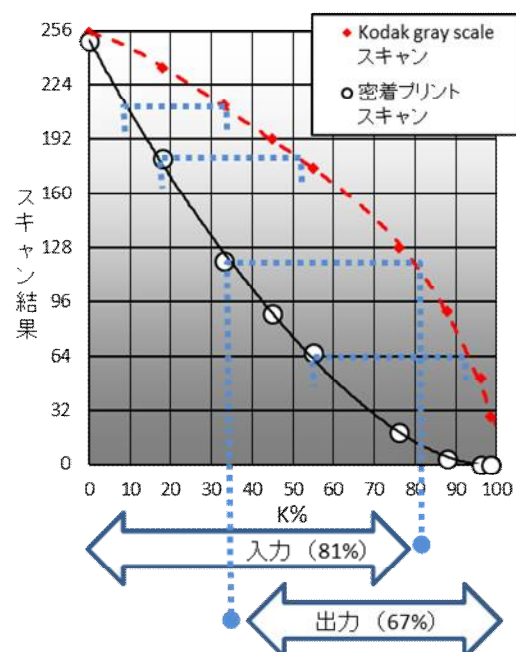


図 13 測定値のグラフ

を数本引き、これと二本のカーブとの交点から「入力」と「出力」のペアを読み取る。

グラフの作成から「入力」「出力」計算までを自動化する Excel のシートを用意したので、「補正計算 (スキャナー)」に測定値を入力すればよい (図 15)。トーンカーブに設定できる値のペア数は限りがあるので、計算結果から適宜選ぶ。

数値ペアが求まったら、図 10 のデジタルグレースケール (選択した n で選ぶ) を開き、「反転と補正と補正トーンカーブ」を表示して「入力」と「出力」欄に 1 点ずつ記入していく。(図 14)

このときは トーンカーブ表示オプション から 色材量 (0~100%) を選ぶ。

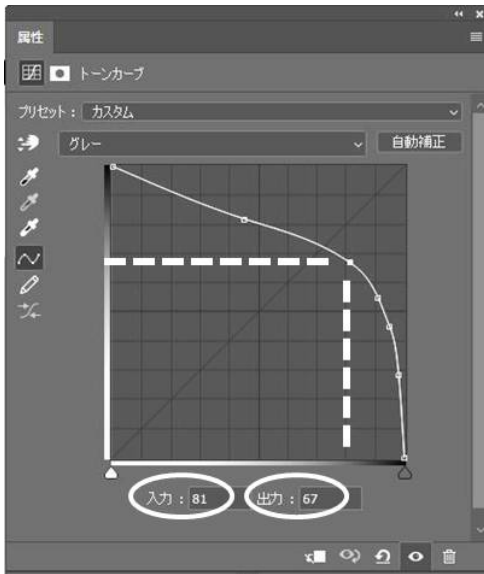


図 14 反転と補正トーンカーブ

濃度	スキャナ結果		トーンカーブ								
	Kodak Gray Scale	コンタクトプリント	n=1.0		n=1.2		n=1.4				
	入力	出力	入力	出力	入力	出力	入力	出力			
0	29.8	29.3	0	100	0	0	100	0	100	0	
0.1	2.27	1.58	21	92	8	18	93	7	16	94	6
0.2	2.03	8.6	39	88	12	33	89	11	29	91	9
0.3	1.81	5.9	51	83	17	45	86	14	41	87	13
0.4	1.63	4.5	61	80	20	55	83	17	50	85	15
0.5	1.46	3.8	69	76	24	63	80	20	58	82	18
0.6	1.31	3.4	78	73	27	70	77	23	66	79	21
0.7	1.18	3.2	81	70	30	76	74	26	72	77	23
0.8	1.06	3.1	85	67	33	81	71	29	77	74	26
0.9	95	30	89	65	35	84	69	31	81	72	28
1.0	84	30	91	62	38	88	66	34	84	70	30
1.1	76	30	93	58	42	90	63	37	87	66	34
1.2	66	30	95	53	47	92	58	42	90	62	38
1.3	60	30	98	50	50	94	56	44	92	60	40
1.4	53	30	97	45	55	98	51	49	94	50	46
1.5	46	30	98	40	60	97	46	54	96	50	50
1.6	39	30	98	35	68	98	38	62	97	41	57
1.7	33	30	99	32	78	99	27	73	98	31	65
1.8	29	30	100	0	100	99	0	100	98	0	100
1.9	25	30	100	0	100	100	0	100	100	0	100

図 15 補正值計算 Excel シート (入力例)

完成したトーンカーブはトーンカーブプリセットを保存で適当な名前を付けて保存する。(図 16)



図 16 トーンカーブの保存

■補正データの適用

プリントするグレースケール画像(Ⅲ)を Photoshop で編集し終わったら、最上層にレイヤー>新規調整レイヤー>トーンカーブを設ける (図 17)。ここに図 16 で保存しておいた「反転と補正」トーンカーブを読み込む (図 18)。

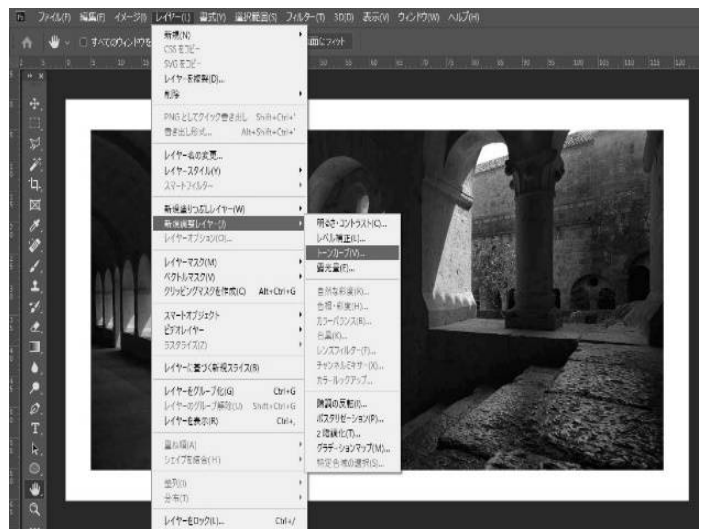


図 17 トーンカーブレイヤーの作成

(Ⅲ) 画像の周囲には太い白縁を設けておくこと。階調を調整するときの比較対象として必要である。



図 18 トーンカーブプリセットの読み込み

画像がネガになるので (図 19)、デジタルネガ用紙に左右反転出力する。

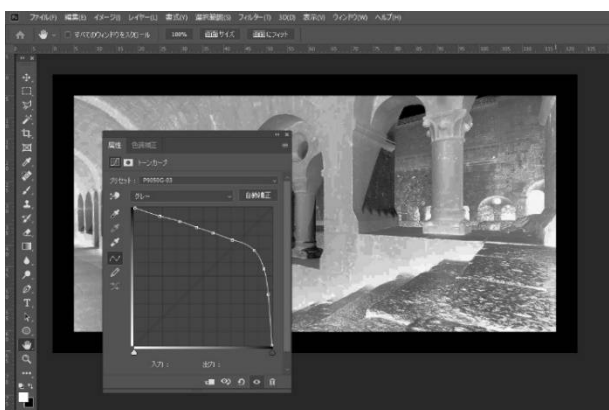


図 19 「反転と補正カーブ」の適用

完成したデジタルネガを、試し焼で求めた条件で印画紙に密着焼する。

■まとめ

デジタルネガを用いることで、画像品位やアーカイバル性に優れるゼラチンシルバークラウドプリントのイメージを的確に表現できるようになった。焼込みや覆焼きなどの作業もモニターで結果を見ながら、納得できるまで試行錯誤できるので表現の自由度が増す。印画紙のロスも大幅に減らすことが出来た。

さらに、8×10 ネガもデジタル化することで巨

大な引伸し機が不要になるなど、メリットは大きい。

■補足① 微修正

一回の補正で不十分な場合は次のように微修正する。出力用グレースケールに「反転と補正」トーンカーブを適用し (図 16 の状態)、デジタルネガを作ってプリントする。(IV) これを図 12 と同じ要領で測定してグラフを作る。このとき、トーンカーブの「出力」に用いる値は、図 20 に示す要領で求める。Excel を用いればこれも自動的に計算できる。(図 15 表の「補正のみ」列)

この「微修正トーンカーブ」レイヤーは、初めに作った「補正と反転」レイヤーの直下に置く。(図 21)

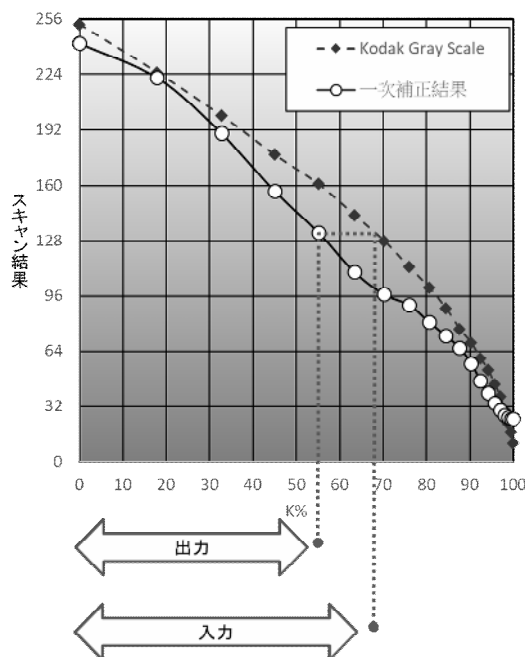


図 20 微修正データ

(IV) 余白に出力用グレースケールを縮小して貼り付けておけば、プロセスの再現性を常にチェックできて便利である。

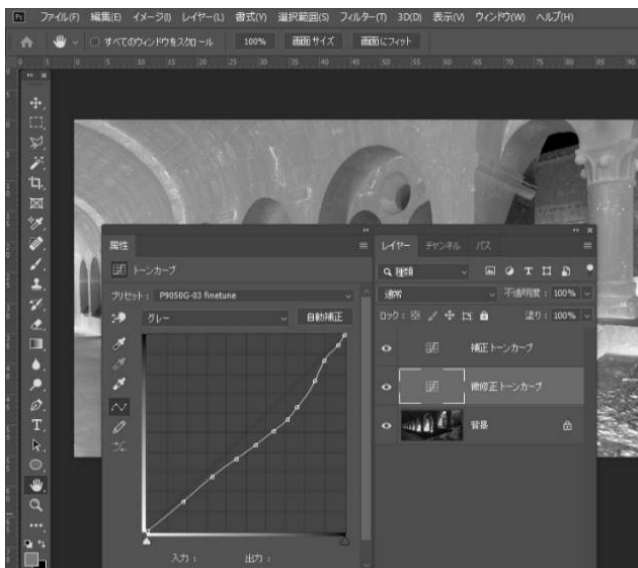
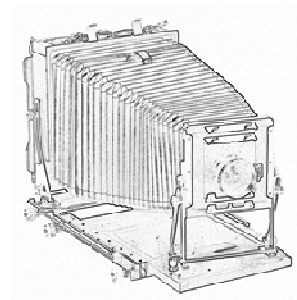


図 21 微修正レイヤー

■補足②

デジタルネガのインクジェット出力は、「ピクトリコ プリント工房^(V)」などで注文できる。注文する際はPhotoshopのレイヤーを統合しておき、左右反転を指示する。プリント条件も試し焼のグレースケールと本番とで一定にそろえるよう指示する。

ネガ出力用紙はピクトリコ TPS100、又はピクトリコ プロホワイトフィルムのいずれかを選ぶ。ホワイトフィルムの方が最大ネガ濃度や階調性に優れるが、印画紙とネガの間にわずかでも隙間があるとボケが目立ちやすいのが難点である。^(VI)



^(V) https://www.pictorico.jp/print/print_kobo/

^(VI) 厚手のガラス板を使い強く加圧するか、真空イーゼルを使う。なおホワイトフィルムは紫外線を透過しないので、プラチナプリントやサイアナタイプなどには使えない。

注) 本記事に関して不明の点は、直接筆者にお問い合わせください。

日本カメラ中島代表記事掲載

モノクロ現像、暗室入門からオルタナティブ・プロセスまで

写真技法を学ぶ

第4回

4×5¹/₂判シートフィルムの撮影に挑戦してみよう

取材=GOZEN

すべてを自分で選択できるのが「銀塩写真の魅力」ですね

「高校時代から写真に興味を持ち、飛行機の写真を撮っていました。ある時、写真仲間の先輩にフェロタイププリントを見せてもらい、モノクロプリントの美しさを知ったんです。ブルーバックのトーンがとても綺麗でした」

その後、東京写真大学（現・東京工芸大学）に入学し、写真部で活動する。「プレッソンなど、35¹/₈判のスナップショットに憧れていましたが、卒業間際に大学の先輩からの紹介で細江英公さんのアシスタントになりました」

Study 1 4×5¹/₂判フィルムで撮影することの喜び

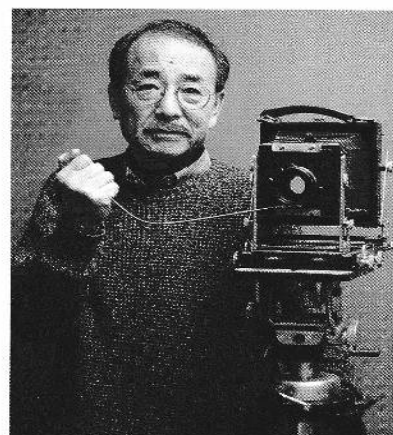
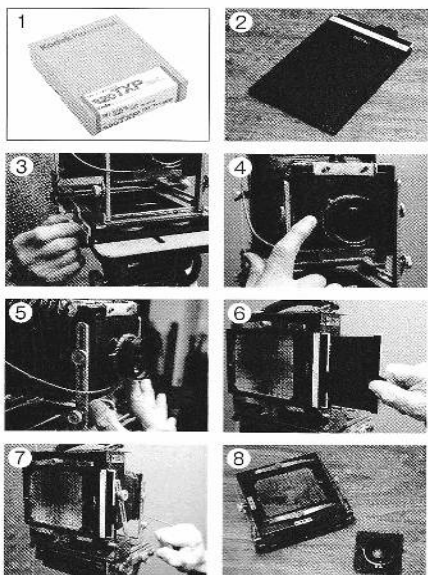


中島さんがシートフィルムの魅力に取り憑かれたきっかけは？

「カメラを組立てることから始める4×5¹/₂判フィルムでの撮影は、まずフィルムを決めて自分で現像し、自分のネガを作ることが重要です。勘に頼ったり、メーカーデータではないオリジナルデータを見つけることが大切になります。自分でコントロールする楽しさがあります」（中島さん）。

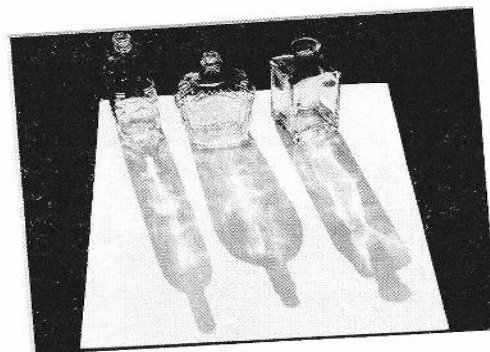
写真左：4×5¹/₂判カメラ、スポット露出計、フィルムホルダー、データシート。写真右：細江さんの書庫から見つけた中島さんの人生を変えた1冊。【ZONE SYSTEM MANUAL】(Minor White)、1986年に参加したゾーンシステムワークショップのプリント。

- 1 シートフィルムを用意する。中島さんの常用フィルムはコダックトライX、T-MAX400。イルフォード、Adoxなどもシートフィルムをラインアップしている。
- 2 シートフィルムをカットフィルムホルダーに装填する。この作業は全暗室で行わなければならない。
- 3 レンズのシャッターを開け、カメラの蛇腹を前後してピントを調整する。撮影機材はWISNER 4×5 CLASSIC FIELD CAMERA、リンホフ・テヒニカのレンズボード、富士フィルム150¹/₈、F5.6。
- 4 露出計で導き出したシャッタースピードと絞りを調整する。ゾーンシステムでの撮影の場合はデータシートを用意し、データを残しておく。
- 5 レンズのシャッターを閉めて、シャッターのチャージを行う。
- 6 カットフィルムホルダーをカメラにセットし、引き蓋を抜き取る。
- 7 シャッターレリーズを使いシャッターを切る。
- 8 木製の大判カメラはコンパクトに折りたたむことができる。



ゾーンシステムという技法を追求し、銀塩作品を作り続けている中島秀雄さん

1968年東京写真大学（現・東京工芸大学）卒業。写真家・細江英公氏の助手となる。1972年、細江英公オリジナルプリント展のためのプリントを担当。1977年、細江スタジオから独立しフリーとなる。1986年、アメリカ・バーモント州ゾーンワークショップに参加。1995年「ゾーンシステム研究会」設立。写真展多数。写真集に『藤田昭子の原風景』（筑摩書房）、『ゾーンシステム・ハンドブック』（朝日ソノラマ）などがあるゾーンシステム研究会代表。



4×5¹/₂判カメラで撮影した、中島さんの作品「透過する光の観察」

日本カメラ 2020年4月号に中島代表の記事が掲載されました。本誌は「いま、なぜフィルムカメラが熱いのか」という特集記事を組んでおり、中島代表記事以外にも大変興味深い記事がたくさん掲載されています。今回冒頭ページのみを掲載しましたが、ぜひ本誌を購入していただいて記事を御一読ください。（本誌はバックナンバー扱いで書店に注文すればまだ手に入ります。）

ゾーンシステム研究会定例会日誌

2020年1月11日(土)

文京区シビックセンター 会議室

・出席者：中島代表、臼井、畑、長谷川（登）、金子、三浦、浜野、小菅、荒井、葛城、橘田、北野、岡崎、石井（政）、石井（康）、鈴木（知）、松本、金野、中澤、古谷津

■今年のテーマ

- 「冬を撮る」
- 抽象的なイメージ 冬を感じさせるもの（風景に限らない）を狙ってほしい。

■写真展関連

- 従来のアマチュア向けギャラリー開催を見直したい。レベルの高い鑑賞に堪える作品を選ぶ。
- 従来行ってきた写真展展示作品の収集は中断する。（荒井）

■冬の撮影会

- 2月15～16日予定。
（今年は雪が少ないので場所が未定。）

■ワークショップ

- 大型カメラワークショップを予定。
- ゾーンシステムワークショップは5月の見込み。



2020年2月8日(土)

文京区シビックセンター 会議室

・出席者：中島代表、荒井、石井（政）、石井（康）、臼井、大内、岡崎、葛城、北野、橘田、小菅、鈴木（武）、鶴見、中澤、長谷川（勇）、長谷川（登）、畑、浜野、松本、三浦、宮内

・欠席者

- ・白紙委任：越後、金子、川北、古谷津、金野、鈴木（知）、藤田、藤森、皆川、吉田
- ・休会：大野、倉又
- ・退会：田中

【2020年総会】

■総会の成立

出席会員と白紙委任が過半数であり総会は成立





■議長選出：葛城氏を選出

■中島代表挨拶

- 今年のテーマは「冬を撮る」だが、雪は少ない。2月15～16日に八ヶ岳方面の氷撮影会も検討している。
- 研究発表では印画紙の比較を行いたい。
 - ・各自が同一のネガから複数の印画紙にプリントして比較。
 - ・セーフライトのテストも含める。
- 大伸ばしの検討を暗室ワークで行う。参加者には印画紙を支給することも検討する。
- 写真展の会場として、レベルの高い展示を目指しギャラリーE&M西麻布を予定する。
 - ・展示は一人一点程度になる。
 - ・展示作品は必ずしも「冬」に限定しない。



■昨年の報告、今年予算案、活動計画報告（畑）
すべて承認された。

■会計監査報告（長谷川（登））

承認された。

■質問と提案

●予備費が多くなっているの、会費の値下げを検討してほしい（北野）

→ 検討する（事務局）

●役員や写真展実行委員が例会以外で集まる場合は交通費などを補助してはどうか？（小菅）

→ 検討している（中島代表）

●今年の写真展はE&Mということだが、従来の会場（シリウスやポートレートギャラリー）などが使えなくなる惧れはないか？

また、大伸ばしにチャレンジしても展示できるスペースがないのでは？（橘田）

→ 会場は今後も交代していきたい。（シリウスは連続使用不可）

大伸ばしの展示は次回以降にしたい。今年はレベルアップの課題解決に充てたい。（中島代表）

■その他

●役員と写真展実行委員は留任

●休会：大野、倉又

●退会：田中

■本日のセミナー（総会后開催）

●「抽象画入門」 画家 金子善明氏

Information

【売ります・譲ります】

■畑文夫

*品物のリスト・写真・価格は、ゾーンシステム研究会ホームページを参照してください。

■松本ひさ子さん遺品（事務局より）

*故・松本ひさ子さんの遺品を会員に使って欲しいというお申し出がありました。希望者は、この会報発行後の最初の例会までに事務局へご連絡ください。無料ですが送料は負担願います。

*品物のリスト・写真は、ゾーンシステム研究会ホームページを参照してください。

■中島秀雄

●フィルム水洗器（4×5）GRAVITY WORKS

価格 5000 円

●フジ A450 引伸機

価格 50000 円

●恒温器（トレイ用）

価格は出品者に問合せのこと

●シャッタースピードテスター

価格は出品者に問合せのこと

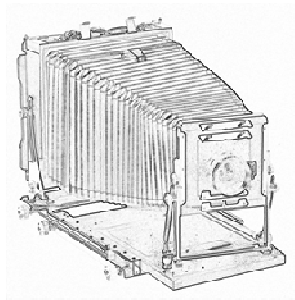
【原稿募集】

会員の皆様からの原稿をお待ちしています。

[以下原稿投稿に関するお願い項目です。すみませんがよろしく願います。]

1. 写真原稿は、紛失事故防止のためできるだけネガやポジは避け、プリント又は JPEG データで願います。
2. 手書き文章はスキャナーでパソコンへ入力できないので、原則として受け付けません。以下いずれかの方法にて投稿願います。
 - ・ワープロやパソコンでプリントアウトしたもの。
(スキャナーでパソコンへ入力します。)
 - ・パソコンの電子メール
 - ・ウィンドウズの Word2000-2010
 - ・text ファイル
(ちなみにこの会報は、ウィンドウズの Word2010 で作成しています。)ただし、どうしても手書き文章しか投稿できない事情がある場合は、事前に御連絡をいただくよう願います。
3. イラストは手書きでも結構です。スキャナーで取り込みます。

[編集部] 荒井崇



[表紙の作品]

- 作者：鈴木知之
- タイトル：Cocoon Tower (繭の塔)
- フィルム：TMY400
- フォーマット：4×5
- レンズ：90 mm
- 絞り：f32
- シャッター：4 秒